書評「ムシの考古学」

坂東　舞

京田辺市立田辺小学校　clockwork71@live.jp

キーワード：昆虫考古学，昆虫化石，古生物

著者　　森　勇一（金城学院大学）
発行所　株式会社　雄山閣　2012年8月24日　初版発行　237頁
2400円（税別）　ISBN978-4-639-02244-2

遺跡から発見された昆虫化石を手掛かりに，当時の環境や人々の生活を探るのが昆虫考古学です。著者は，昆虫考古学の第一人者として，また昆虫に関する幅広い知識と研究業績を活かして古生物学分野でも大活躍しています。

1987年，愛知県春日井市の勝川遺跡（古墳時代）調査で，真っ黒な土の中から多数の“ビニール片”が発見されます。大きさは3〜5ミリメートル。鮮やかな緑色の光沢は空気に触れた途端，色褪せながら縮んでしまう…。やがて遺跡の調査は終了。しかし，この“ビニール片”の正体だけは，著者を深く悩ませたままでした。

それから3ヶ月後，熱心な研究の成果が実り，“ビニール片”の正体が明らかとなります。なんと，“ビニール片”はゲンゴロウの羽の一部だったのです。通常は黒褐色をしているはずのゲンゴロウの羽が，なぜ緑色に変色していたのでしょうか。それは，還元状態の土の中に長い間埋もれていたためでした。ここから著者の昆虫化石研究がスタートします。

昆虫化石は，多いもので100以上の破片に分散しているため，一つ一つがとても小さく，同定には幅広い知識と鋭い観察眼，そして何より，根気強さが必要となります。走査型電子顕微鏡での観察でようやく同定できる昆虫化石も珍しくはありません。昆虫の分類や同定には，それぞれの分野に専門家がいて分業が行われています。しかし，昆虫考古学の分野では，一人で多くの分類群を研究する必要があるため，本当に大変であると著者は語ります。「長い間調べ続けた昆虫片が現生標本とピッタリ一致したときなど，思わずバンザイを叫びたくなる。」著者の言葉からは，日々の奮闘ぶりと共に，昆虫化石研究の魅力が伝わってきます。

地球上の生物界で数と種類においては圧倒的多数を占め，古代から現代まで繁栄を続ける昆虫。虫捕り網を持って駆け回った幼少時代の記憶が蘇る人も多いのではないでしょうか。小さな昆虫化石から得られる膨大な情報は，私たちが決して見ることのできない古代の世界を，まるで目の前に広がる光景のように鮮明に映し出します。たった一つの化石から広がる世界。考古学や古生物学の醍醐味を教えてくれる一冊です。